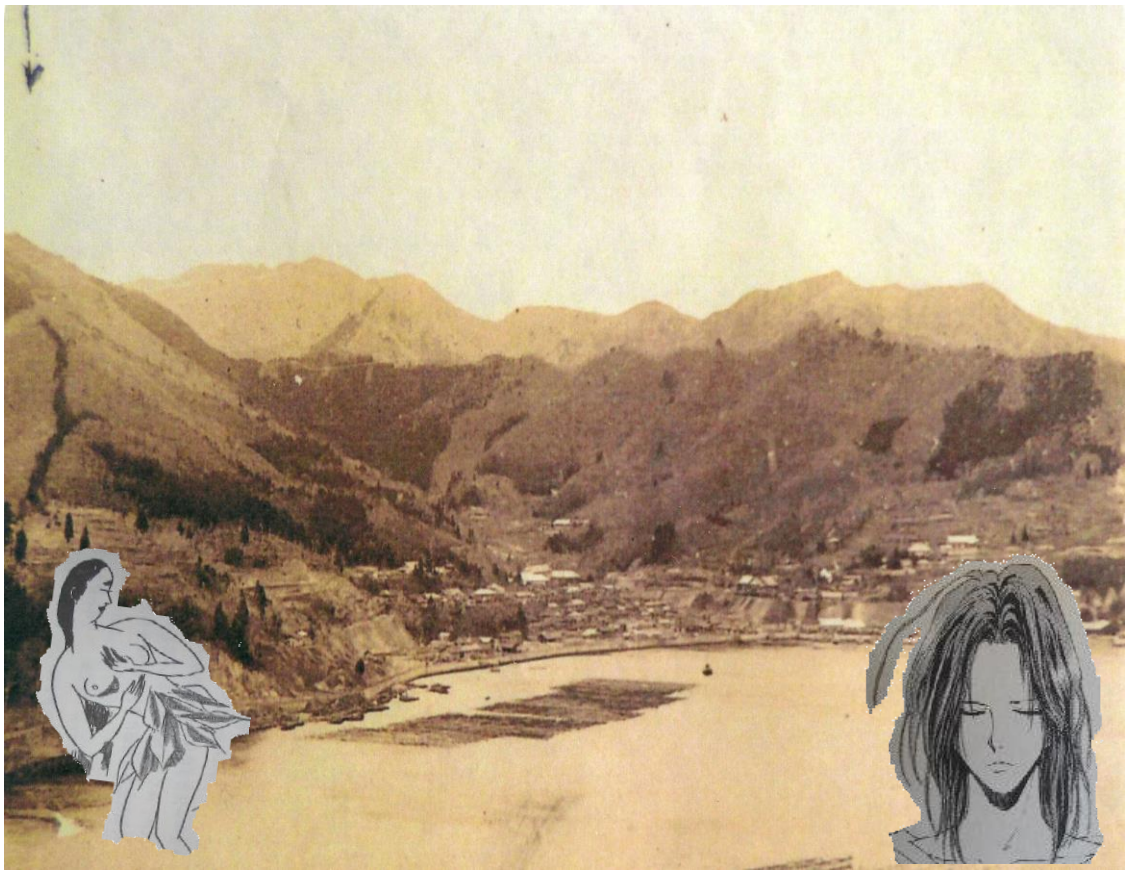
唐丹の民話・２１話「小白浜地区」

つるぎ　坊主



―海坊主の化身か　彷徨う亡霊か―

平成２０年８月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目　次

―　つるぎ坊主　―

唐丹民話の再話著作にあたって、および原文・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅰ．小白浜の地形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
１．急峻な地形で平地なし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
２．住みにくかったか、先人も・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅱ．おっかなくて、寂しい「つるぎ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
１．つるぎ（つるき）の地名の由来・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
１）蔓木と吊木と剣について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
（１）「吊木」に因んだ伝説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
①　天狗囃子か狸囃子か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
②　喜の新築に、連なる不幸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
（２）樹木に木霊が宿る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
２）鶴来について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
（１）鶴来に因んだ伝説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Ⅲ．つるぎ坊主・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
１．謎の女・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
２．海坊主の化身か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（１）海坊主とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
（２）海女の妖怪の譬（たと）え・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
３．ひろがる噂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
４．謎の女の正体は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
民話関係者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成１７年６月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成２年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第１集から第６集に掲載の民話の数は９２編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物話の**「つるぎ坊主」**は、釜石民話第２集**「つるぎ坊主」**と**「太鼓の音」**を合わせて再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

その１．「つるぎ坊主」

唐丹町の海岸につるぎという所がある。舟主は、漁にいって帰ってくると舟をその場所につないでおく。

そして、翌日舟主が出漁の為にその舟にいくと、どこの女の人なのか、舟に乗っている。が、舟主が舟に乗るとポンと身軽に陸に上がるという。

どこの者なのか全くわからない。漁師連中は気味が悪いものだと語り合った。

昔からその所では、多数の人が亡くなっているので、誰いうとなく「つるぎ坊主」がでたというようになった。

また、その近くに「かっぱ岩」という岩がある。昔は、よく「かっぱにひっぱられるな」と注意したという。

つるぎ坊主の名を知っているか？と聞いても知っている人も少なくなっている。

話し手　川原セイさん／小白浜

原文は、おしまい

その２．「太鼓の音」

唐丹の黒山は、岩のゴツゴツした山だが、その所に一本の大きなけやきの大木があった。まわりには草も生えず立派な木だった。

夕刻になり、子供らが家に入る頃「トトン、トトン、トントン」と太鼓の音がどこからともなく聞こえてきて木挽夫婦は耳をしまして聞いたそうだ。

ところが、持主がその木を切って家を建てなおすのに使用することにしたが、いざ切るとなると風は吹く、雨が降る、で中々切れなかった。ようよう二十日以上かかって倒した。

やがて新しい家が出来たが、年寄りが死に、続いて家長が死に、息子が海になだれこんだ崖に藤蔓（ふじつる）で木を吊るして通路とした、吊木（つるぎ）という所で海に落ちて死んだ。三人目の人が亡くなり入棺する時、生き返り三日程生きて死んだという。

その家に行った人が、神棚を見ると逆木で作ってあったのでなおしたが、その後、その家は人手に渡ったということだ。

この話をした木挽さんも、とうに亡くなり、今は忘れられるようになった。

話し手　尾形ヨシエさん

原文おわり

『おことわり』

この「つるぎ坊主」は、物語の全体感をつかむために、「Ⅰ．小白浜の地形」と「Ⅱ．おかっなくて、さびしい、つるぎ」を前段に挿入。本題は、Ⅲ.「つるぎ坊主」からになります。

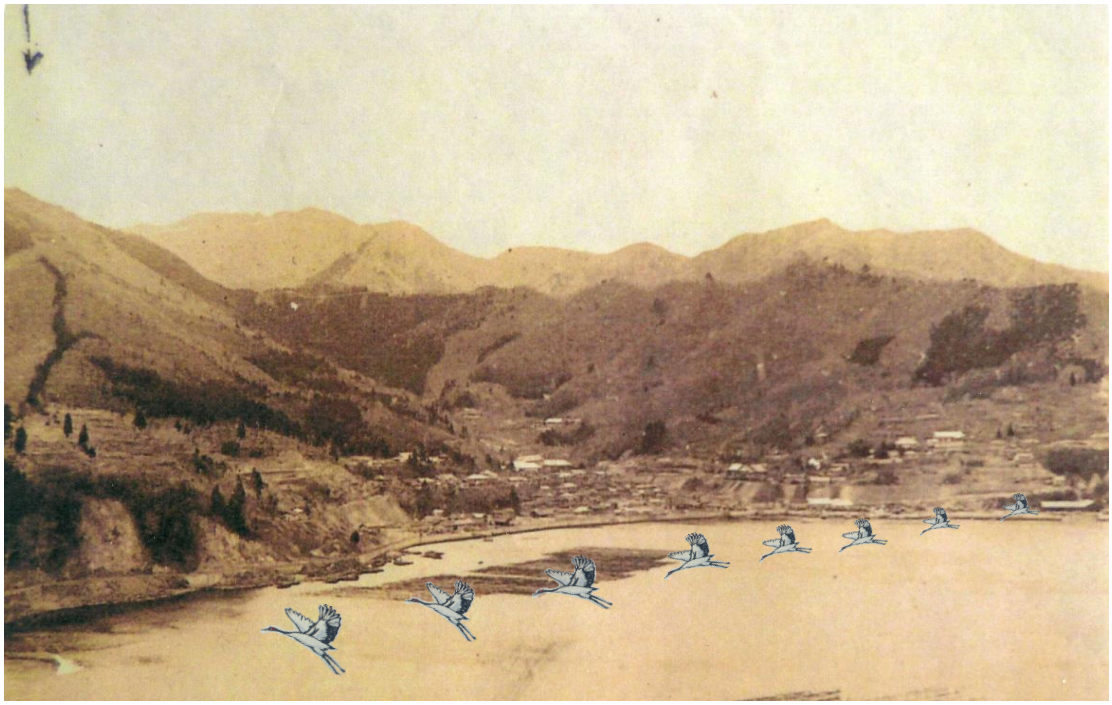
校正指導者

つるぎ坊主

Ⅰ．小白浜の地形

１．急峻な地形で平地なし

小白浜の海岸の形は、西は南北に、北は東西に鉤状（かぎじょう）に、山は急に迫って海に臨んでいるため、平地がなく、港は深い。北側の角の所に、二本梨の小川が流れ込んで、わずかに、傾斜地の狭い谷間をつくっています。



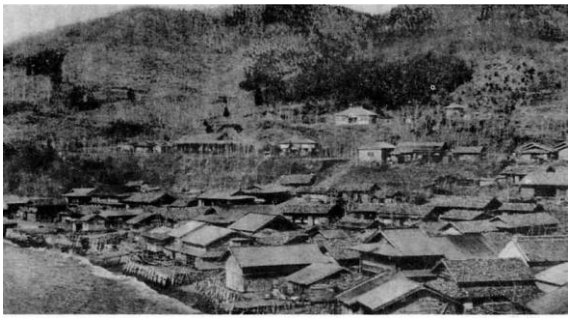
（小白浜の全景・昭和９年３月と鶴来に鶴飛来の想像図）

２．住みにくかったか、先人も

先史時代の遺跡も、大石や屋形、本郷の大曽根、荒川などの大きさから見ると小白浜は小さいようです。

先人も住みにくかったのかもしれません‥‥。

昔も今も、家並は、標高差の高い斜面にへばりつくように、段々にぎっしりと建ち、小白浜の地形を象徴しているようです。



（昭和８年津波前の小白浜）

Ⅱ．おっかなくて、寂しい「つるぎ」

昔々の大昔から、片岸方面と小白浜方面を往き来するには、浜街道の「伝城坂」と海辺の岩場や崖下（がけした）を通る「つるぎ」の、ふた通りがありました。

「つるぎ」は、険しい岩場や崖下の海辺を通るため、足を滑らせてり、体がよろけて転落。あるいは、突然のがけ崩れなどに遭ったりして、多くの人が、命を落としたといわれています。

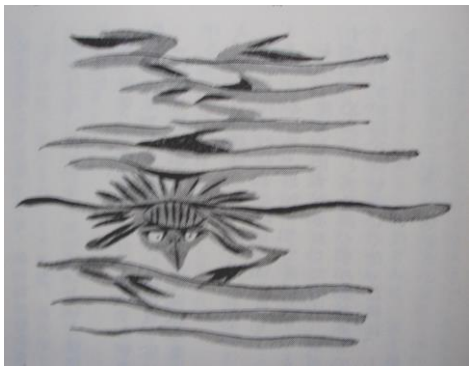
さらに古くは、中世の頃、愛馬の諍（いさか）いから、海を泳いで逃げる法印様が馬主の殿様の弓矢につらぬかれ、無念の死を遂げた所という悲しい伝説。

また、明治２９年の大津波の時、死体の検視場所になったところです。

そして、つるぎの東の方に、かっぱ岩があります。子供たちは、水泳ぎや魚釣りに行くとき、親や大人たちから「かっぱ」にさらわれるなよと、よく注意されました。

そこを通るときなどには、ヒヤヒヤ、ドキドキしながら、歩いたものでした。

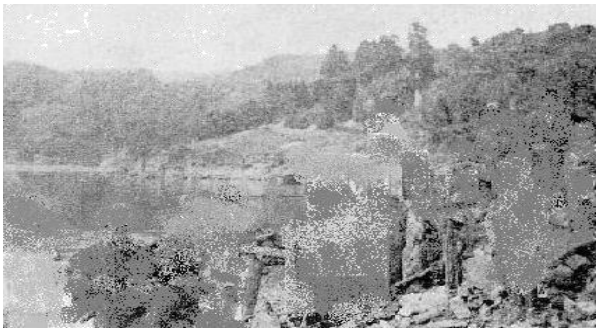
（かっぱ岩・河童の絵に似ている？）



（河童の絵）

こんなことなどから、昔も、今も「つるぎ」は、おっかなくて、寂しいところといわれるようになったのでは、とも思われます。

昔は、それでも、「つるぎ」の方が、「伝城坂」より近道なのか、ここを通る人が絶えなかったのでしょうか‥‥。



（明治２９年６月頃のつるぎ周辺）

１．つるぎ（つるき）の地名の由来

１）蔓木（つるき）と吊木（つるき）と剣（つるぎ）について

けわしい岩場や崖を歩くのに大変なため、自然に生えてたれ下がった蔓（つる）や木にすがって通ったから「蔓木」。また、藤蔓（ふじつる）などで木を吊るして、その上を通ったから「吊木」。

あるいは、剣（つるぎ）の刃のように、けわしい道だから「つるぎ」などの諸説もあるようです。

（１）「吊る木」に因んだ伝説

唐丹の黒山は、岩でゴツゴツして、周りには草も生えないが、そこには、立派な欅の大木が生えていました。

いつものように夕暮れになり、子供らが家に入るころになると、どこからともなく「トントン、トントン、トトトト、トン。～」と太鼓をたたくような音が、聞こえてきます。

四季おりおりの趣（おもむき）をみせる、黒山の彼方から‥‥。（黒山の欅の想像図）

木挽さん夫婦は、いつもの心よい音色に耳をすまし、聞き惚れていた。が、この音が聞こえると、災いも起きるという言い伝えを心配しつつ‥‥。

①　天狗囃子か狸囃子か

ある地方では、このような事を「天狗囃子や天狗倒し、または天狗笑い」といい、これを聞けば何か奇怪なことが起きると言い伝えられています。

（天狗の面）

また、遠野地方でも、「初めは、カキン、カキンと聞こえ、いい位の時分になると、ワリ、ワリ、ワリッ、と木が倒れる音がして、その端風（はしかぜ）が、人のいる処にふわりと感じられるという。

これを『天狗のナメシ』ともいって、翌朝行って見ても、倒れた木は一本も見当らないそうだ。

また、ドドドン、ドドドンと太鼓のような音が聞えることもある。

これを、『狸の太鼓』だとも言えば、他に『天狗の太鼓』の音とも言っている。

そんな音がすると二、三日後には、必ず山が荒れる」。という物語があります。

（狸のお化け→）

②　喜の新築に、連なるは不幸

さて、しばらくして、山の持主がこの欅を切り、建てなおす家の柱にすることにしました。

いざ欅を切ろうとすると、風が吹いたり、雨が降ったりとなかなか切れません。それから、２０日以上もかかって、漸く切ることができました。

やがて、新しい家ができ、喜びのはずが、次々に不幸がつづきました。ばあさんが死に、続いて家長の死。さらに、息子が、海に落ちて死んでしまったのです。

そこは、海岸の崖に、木を藤蔓で吊るした道、通称「吊る木（つるぎ）」で‥‥。

三人目に息子が亡くなり、お棺に入れようとした時に生き返り、三日ほど生きて死んだという。

ある人が、新しく建てた、その家のお葬式に行きました。その時、ふと神棚を見ると“逆木”で作ってあったのです。

これは、縁起がよくないと、その家に人たちに告げ、間もなく直したそうですが、その後、その家も人手に渡り、家系も絶えた‥‥。というような言い伝えがあります。

（２）樹木には、木霊（こだま）が宿る

木の神は、久々能智（くくのち）の神。日本書記に木祖（きのおや）、句句廼馳（くくのち）と記されています。「クク」は茎のこと。茎のある植物木の意味。「ノ」は何々の。「チ」は精霊を表す言葉とされています。

古から建物に使う桧や杉、神木となるような樹木、老木などには、木霊が宿るとされてきました。

また、木々は自然体で使い「逆木（さかき）」は忌み嫌い、ご法度のようなものでありました。

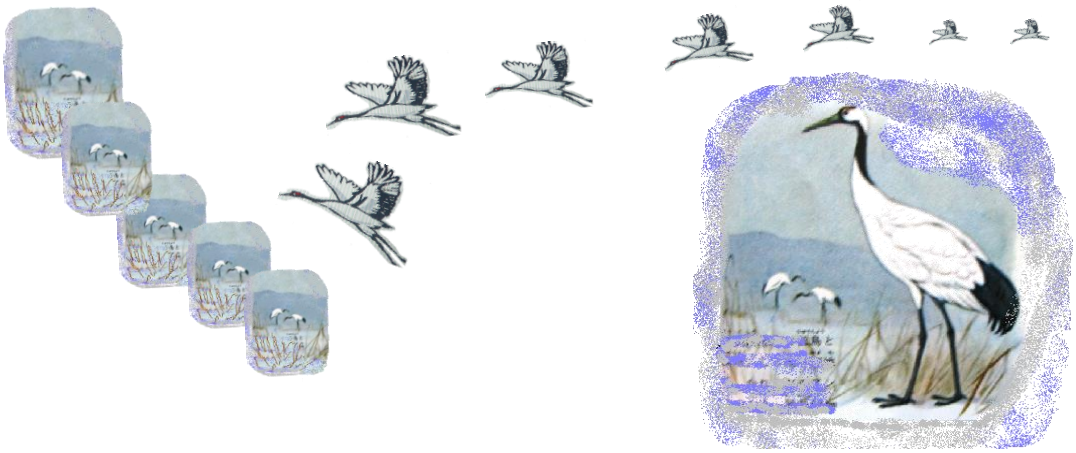
とにかく、神霊であれ、精霊であれ「恐（かしこ）み、恐（かしこ）み、申す」でありまして、祟りは、恐ろしいものであるということです。

２）鶴来（つるき）について

古くから、鶴は優美な姿が長寿の霊鳥と賞されていました。

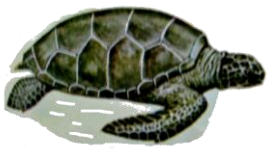
秋になると寒さが厳しくなる北の方から、暖かい方に飛んで来て、冬をすごし、翌年の春になると、また北の方へ飛んで往く渡り鳥です。

その鶴が小白濱の海辺にも飛んで来るから「鶴来」といわれています。



（１）　鶴が来ることに因んだ伝説

盛岩寺境内の瘞龜之碑（えいきのひ）（亀を埋めた）・供養碑に、



「文政（甲申（きのえさる））七年九月、小白浜の漁師の網に亀が入り、盛岩寺の池に放しておいた。

ところが、その月の十四日昼頃、鶴が飛んできて、松にとまり亀を眺めていた。（中略）

その年の十一月、御上様（伊達の殿様）より、池辺の鶴を、仙台御城下へ上らせるよう仰せつかる」。（以下略）

云々と、小白浜に鶴が来ていたという趣旨のことが、史実として刻まれています。

（瘞龜の碑）

（盛岩寺の池）

（亀と鶴）

Ⅲ．つるぎ坊主

１．謎の女

さて、昔、むかし、地名の由来に諸説がある、この「つるぎ」に、小白浜の漁師たちの舟つき場がありました。

ある漁師が、漁からもどり舟をつなぎ家に帰る。次の日、また漁にと浜に来れば、どこのだれか分からない、女が、自分の舟に乗っているのです。

ノッペラボウでもないようだが、真人でもなさそうだ。長い黒髪に、目鼻立ちが整っていそうだが、はっきりしない。得体の知れない、謎の女が‥‥であります。

（謎の女の想像図）

２．海坊主の化身か

漁師は、亡霊か、妖怪か、物の怪か、はたまた狐か狸か狢（むじな）か。あるいは、海坊主か‥‥。その何ものかが、俺に憑（つ）こうか、化かそうか、と窺（うかが）っているのか‥‥。と思いました。

そこで、怖いながらも勇気を奮い、少しからかってやれと舟に乗ると、ポンと身軽に陸に上がる。この女郎と思い、自分が陸に上がると、そのものは舟に乗る‥‥。　（謎女の舟の絵→）

（海坊主の化身想像図）

声をかけても、返事もない。　（謎の女が舟に想像図）

しかし、そのうちに、自分の気持もどこかにいっているようで、定まりもなくなってきたようだ‥‥。と感じ始めました。

これは、この辺でいう、「夜の沖合いで、海坊主が、美しい女に化け、一緒に泳げと誘う」などの話のようだ。だが、そのような目に遭ったことがない‥‥。

（1）海坊主とは

その海坊主とは、「黒くて、目鼻のよくわからない大入道で、眼光鋭く、嘴（くちばし）がとがっている。海坊主に出逢ったら、絶対騒いではいけない。騒ぐと舟を転覆させられる」との話も、漁師は聞き及んでいました。

（2）海女の妖怪の譬（たと）え

ある地方の海女の妖怪は、「こちらが潜ると上り、上がると潜る。それに合わせているうちに、息がつづかず死に追い込まれていく。誰だかわからないが、後鉢巻をした、後姿だけがみえるという‥‥」。話もあるという。

３．ひろがる噂

漁師も、だんだんと気味が悪くなり、仲間に事の成りゆきを話したところ、ざわめきが走り、噂は、たちまち浜中にひろがりました。

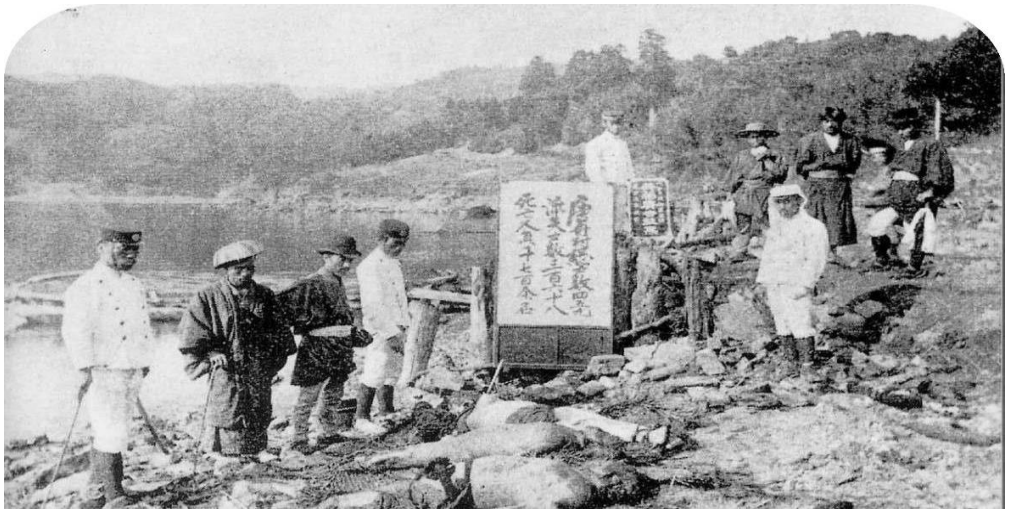
漁師や町の人たちも「何モノだべ」とか「気味悪いがねえ」とおののき、噂が、うわさを呼び、たちまちのうちに町中に広がりました。

４．謎の女の正体は

先にも述べましたが、「つるぎ」では、いろいろなことで、多くの人が命を落としたといわれています。

また、明治２９年の端午の節句に、史上最大級の大海嘯（だいかいしょう）の襲来。

三陸沿岸の波高の最大は、吉浜の２４．４メートル。唐丹の波高の最大は、小白浜の１６．７メートル。



（唐丹村の海岸に漂着した死体。「唐丹村死亡人員千七百余名」の立て札がみえる）

全死亡者は２２，０７２人を数え、唐丹では１，５８５人。そのうち最悪は本郷の７２６人、小白浜でも４６０人。唐丹の全人口２，８０７人中死亡者１，５８５人と５割以上もの人が、一瞬にして波にさらわれ、命を落とし､全被害も史上最大で悲惨なものでした。

しかも、端午の節句の夕刻に‥‥。

その時､「つるぎ」は小白浜などの死体検視の場所にもなったところでもあります。

そのようなことから､「亡霊」が彷徨(さまよ)っているのではないか。とも、噂されるようになりました。

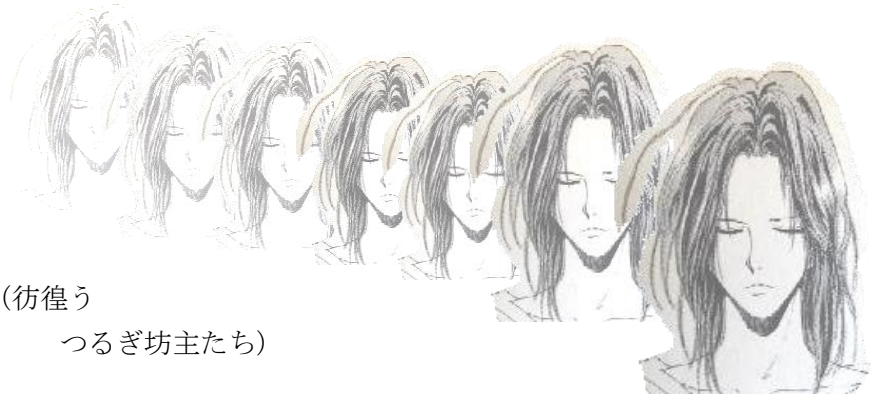
一方では、あれは､「化けた海坊主」だという人もいて、様ざまな憶測がとびかいました。

（つるぎ坊主の想像図）

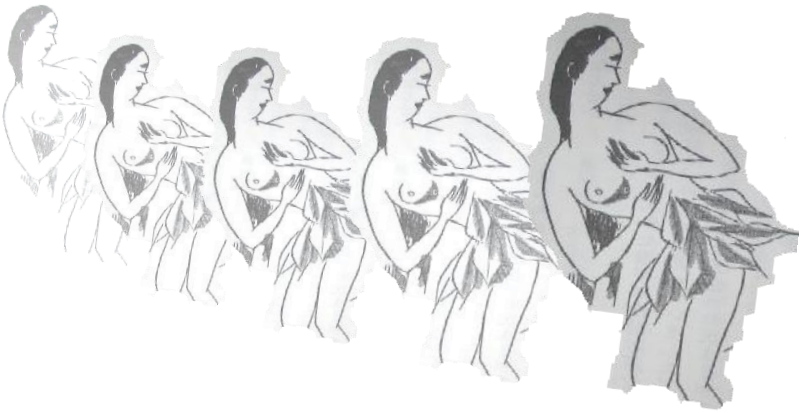
そして、“つるぎに、坊主が出るそうだ”

とか、“つるぎに、坊主が出たそうだ”といわれているうちに、それが、だんだんと「つるぎ坊主」となり、今に、語り継がれるようになりました。

おしまい



（彷徨う
つるぎ坊主たち）



◎釜石の民話・第２集：つるぎ坊主
〇話　し　手：川原セイさん／小白浜
◎釜石の民話・第２集：太鼓の音
〇話　し　手：尾形ヨシエさん／片川？
〇聴 き 書 き：加藤ムツさん／片岸
●再 話 著 者：中山志恵／小白浜地区（唐丹・愛ちゃんネットクラブ）
　　：新沼　裕／本郷地区　（唐丹・愛ちゃんネットクラブ）
●写真撮影者：新沼　裕・中山志恵　（唐丹・愛ちゃんネットクラブ）
●校正指導者：新沼　裕／本郷地区　（唐丹・愛ちゃんネットクラブ）
●再 話 完 成：平成２０年８月

＜参考・引用文献＞

１．釜石市史・唐丹小史
２．歴史の道第２号浜街道上巻･釜石教育委員会
３．日本の妖怪･河出書房新社
４．怪異の民族学･河出書房新社
５．遠野物語
６．釜石地方･海のむかし話

＜追記＞：『つるぎ坊主』の民話には、つながりませんが、『海坊主の怪』という一説を記載しておきます。

明治も末の初夏の頃、釜石浜の男３人が、海釣りに三貫島の海域に舟を漕ぎ出した。

ところが、急に濃い霧が一面をおおい、一寸先が見えず、聞こえるのは潮の音と不気味な海鳥の鳴き声だけである。

すると突然、舟の前方に一丈あまりの蛸入道のようなものが現れた。あまりの恐ろしさに声も出ず、なす術を忘れ、しばしぼう然としているうちに、経験を積んだ１人が「これが海坊主だな」と、とっさに海坊主の言い伝えを思い出し、海坊主めがけて舟を突進させた。

すると海坊主の姿がパッと消え失せるとともに、たちまち霧も晴れあたり一面が、何事もなかったように元の風景になったという。

昔からの言い伝えに、「海坊主に遭ったら、舟を海坊主めがけて真っ直ぐに突進せよ」とあるという。恐れて進路を変えると岩礁などに突き当たり海難に遭うと言う教えである。それを思い出し行動したことが男たちを救ったのである。

海坊主は、光線の反射による自分の姿の影像とも幻覚とも言われ、また一説には、海面に現れたトドの姿であるとも言われている。しかし、不思議な現象であることは間違いない。　　おわり。